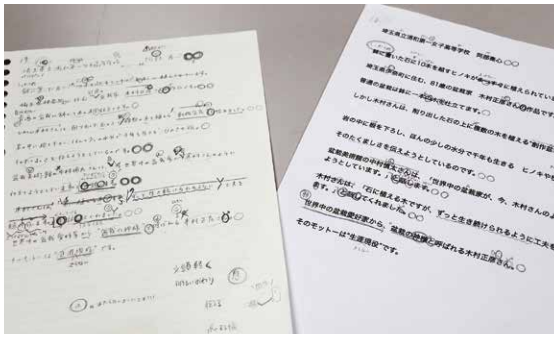
気になるまちの人

令和３年11月21日、さいたま市文化センターで、埼玉県高等学校総合文化祭・第41回高校放送コンクールが行われました。町内在住の阿部奏心さんはアナウンス部門で出場し、伊奈町魅力発信大使で盆栽作家の木村正彦さんを題材にした原稿で、優秀賞に輝きました。令和４年８月に東京で行われる全国高等学校総合文化祭出場への切符を手にした阿部さんにお話を伺いました。



◀練習用と本番用の原稿。書き込みも多く、これで何度も練習し、本番に臨みました。

アナウンス部部長

阿部（あべ）　奏心（かなこ）さん

（浦和第一女子高等学校２年生）

── アナウンス部では、どのような活動をしていますか。

学校行事の撮影（動画）、文化祭や吹奏楽部などの定期演奏会の司会をしています。毎週金曜日はお昼の放送をしています。

日ごろの部活では、滑舌・発声練習をしたり、夏や秋の大会に向けて、アナウンス原稿作りやビデオドキュメントの制作をしています。日々作品の完成を目指して奮闘しています。

── アナウンス部門に出場したきっかけはありますか。

もともと番組制作がしたくてアナウンス部に入りましたが、昨年はコロナ禍で部活動の制限もあり、素材集めや番組制作ができませんでした。

２年生になった昨年の４月、部長になりました。そのころ、先生や先輩に「アナウンスに向いてるよ」と言われ、「せっかく部長になったからには今よりも部活を全力で頑張りたい。挑戦してみよう」という気持ちになり、今回初めてアナウンス部門に出場しました。

── コンクールでは、盆栽作家の木村さんを題材にされたそうですね。

アナウンス部門は、自分で取材対象を決めて、自分で取材をして、自分で原稿を書きます。このコンクールは、郷土・地域のことを全国に発信することが目的です。伊奈町のことを調べていたときに、町のホームページで盆栽作家の木村正彦さんのことを知りました。調べていくうちに、実績のある世界的評価の高い方だとわかり、「地元にこんなにすごい方が住んでいるなんて」と驚きました。伊奈町は小さな町ですが、世界で活躍している方がいることを伝えたくて、取材対象を木村さんに決めました。

── 木村さんに取材してみて、いかがでしたか。

とにかく優しい方で、お話しするのが楽しかったです。一つひとつの質問に、実体験を交えて詳しくお話ししていただきました。また、木村さんのお庭にある一つひとつの作品を丁寧に解説していただきました。

芸術作品として盆栽をゆっくり鑑賞していくと、木から生命力やエネルギーを感じ、とても感動しました。

── 木村さんのへの取材で印象深いことはありますか。

一番印象に残っているのは、「常に挑戦し続けている」という木村さんの言葉です。創作盆栽という誰もしたことがなかった新しい形の盆栽を確立し、世界で評価されていますが、もっと高みへ挑戦し続けたいとおっしゃっていました。これまでどんなに最高の賞をもらってもなお新しいことに挑戦していくことは、なかなか真似できません。一度すばらしい結果を残した後、新しいことに挑戦するのは、「前のほうがよかった」と言われるのではないかと考えてしまい、私は怖いです。それでも新しいことをし続ける木村さんの姿に、感動しました。私も新しいことに挑戦し続けていきたいです。

── ４月からは高校３年生ですね。今後の目標や将来の夢はありますか。

先生にアナウンスを始めると伝えたとき、「結果にこだわらなくていいから、一つの経験として楽しめばいいよ」との言葉をいただきました。楽しむにも努力が必要だと思うので、楽しいと思える段階まで努力することが、夏の大会に向けての一つの目標です。

将来の夢は漠然としていますが、日本語や日本文化が好きなので、大学で日本語を学び、将来はそれを生かせる仕事に就きたいです。

発見！ちょっと

箱根駅伝ランナー

松井（まつい）　尚希（なおき）さん
（中央学院大学４年生）

令和４年１月３日、小針中学校出身の松井尚希さんは、中央学院大学のユニフォームに身を包み、箱根駅伝７区のスタート地点・小田原に立っていました。けがに見舞われた時期もありましたが、挫折を乗り越え、４年間目標としていた夢の舞台・箱根駅伝に出場しました。当時の気持ちやこれまでの活動、そして今後について、お話を伺いました。

▲箱根駅伝を走り抜けたシューズ。

▲箱根駅伝の様子。

――箱根駅伝への思いを教えてください。

箱根駅伝を走るのは自分の最大の目標であり、一番の夢でした。箱根をしっかり走るためにやってきた４年間で、特に最後の一年は全神経を注いで、今までの人生で一番ストイックに頑張ってきたと思っています。

駅伝部４年目、最初で最後の箱根駅伝でした。チームの目標は「８位以内、シード権獲得」であり、自分も最上級生として、後輩にシードを残すため、チームに貢献したいと思っていました。後輩が良い走りをしてたすきをつないでくれたので、一つでも順位を上げたいと思って走りました。実際に順位を一つ上げられたので良かったです。

――走っている間、監督からはどんな言葉をかけられましたか。

前半抑え目、後半10㎞からペースアップしようと考えていました。監督からは、「ペースいいよ」「そのままいこう」「リズム上げよう」などと声をかけられ、タイムが10～20秒変わってくる重要なラスト１㎞では、「スパートをかけろ！」「体が開いているから閉めろ！」と力強く声をかけていただきました。４年間育ててくれた恩師の言葉は、やはり自分の力になりました。

――走っていても沿道の声は聞こえますか。

聞き慣れた知り合いの声は特に耳に入ってきます。中学校の友達が沿道に応援に来てくれて、しかも小針中のユニフォームを着ていたので笑っちゃいましたね。地元パワーをもらって元気が出て、ペースが上がりそうになりましたけど抑えました（笑）。素直に、嬉しかったです。

――苦難や挫折はありましたか。

１・２年生のときはどうしても同期に勝ちたい気持ちが大きく、「人より多く練習しよう」「ここ１本がんばろう」と練習に励んでいたところ、疲労骨折してしまい、合計１年半以上走れない状態が続きました。３年生の箱根駅伝予選会では結果が振るわず、もうやめたいなと正直思いました。その時、初めて陸上が嫌になり、挫折を経験しました。

――挫折を乗り越えられた要因は何でしょうか。

「自分の中でやめようと思えばいつでもやめられる。でも、自分の失敗を取りかえすのは自分しかいない。それなら自分がやってやろう」という奮い立つ気持ちと、やはり箱根駅伝を目指したいという気持ちが大きくなり、ラスト１年、踏ん張ろうと決意しました。

「無理をしなくてもちゃんと練習すれば大丈夫」と自分の中でリズムをとり、自分に合ったメニューで動いていった結果、しっかりと試合で走れるようになりました。４年目でうまくいかなかった試合は１本くらいでしたので、自己管理がしっかりできていたと思います。

――オフの日はどのように過ごしていますか。

すごく疲れているときはずっと寝ます。あとは、走るのが好きなので、オフでも走っちゃいます（笑）。実家にいるときは町内もよく走ります。自宅から鴻巣まで走って、上尾のほうを回って帰ってきたり、30㎞くらいぱーっと走りますね。止まったら歩きたくなるので、信号が戦いです。足踏みしながら信号を待っています。

――今後の目標や、目指す選手像はありますか。

卒業後も実業団で競技を続ける予定です。トラック種目で日本選手権の標準タイムを切って、日本選手権に出るのが一つの目標です。また、チームではニューイヤー駅伝での上位進出を目標にしていますので、それに貢献できるように頑張りたいです。

今後目指す選手像は、早さよりも「強さ」です。１試合１試合勝ち抜かないと意味がないので主要大会で勝ちきれる選手になりたいです。